

# 悪意の科学

意地悪な行動はなぜ進化し社会を動かしているのか？

【立ち読み】

はじめに 人間は4つの顔をもつ

006

なぜ悪意は進化で失われなかったか？／悪の中にある善の起源

第1章 たとえ損しても意地悪をしたくなる 014

人間観をくつがえす研究／悪意に満ちた入札／  
最後通牒ゲームによる発見／配偶者や恋人への悪意／  
ビジネスでの悪意／選挙における悪意／終末論的な人／Dフアクター

第2章 支配に抗する悪意 047

平等主義はなぜ生まれたか？／ホモ・レシプロカンス／  
文化が違えば公平さの基準も違う／正義中毒／怒りと脳／  
共感人間が本来持っている？／コストのかかる第三者罰／  
安上がりな悪意／善人ぶる者への蔑視／悪意のソーシャルネットワーク

第3章 他者を支配するための悪意 091

ホモ・リヴァリス／限られた場所での競争／  
ゼロトニンが減ると悪意が高まる／勝負に役立つ

第4章 悪意と罰が進化したわけ 106

悪意をもたらす遺伝子／公平さと罰の起源／オオカミがヒツジのふりをする

第5章 理性に逆らっても自由でありたい 125

ブレイブハート効果／ドストエフスキーと実存主義的悪意／  
不可能を可能にする

## 悪意は政治を動かす

151

勝たせたくないから投票する／カオスを求める人々／悪意を刺激する／  
「悪党ヒラリー」／挑発的なメッセージと菜食主義／  
専門家にはうんざり／エリートが過剰になるとき

## 神聖な価値と悪意

183

神と罰／自爆テロ犯はなぜ生まれるか？／神聖な価値への冒とく／  
社会的疎外／宗教が新しいストーリーを提供する／  
アイデンティティ融合／人々の協力を促し、地球を救う方法

おわりに 悪意をコントロールする

210

インターネット上の悪意にどう対処するか？／気難しい性格と創造力  
民主主義を弱らせないために／慈悲の怒り

謝辞 232

原注 (01)

解説 266

\*文中、「」は訳者の注記です

## はじめに 人間は4つの顔をもつ

なぜ悪意は進化で失われなかったか？

悪意（意地悪）の根は深い。大昔から伝えられている物語にも悪意に満ちた嫌がらせが描かれている。たとえば古代ギリシャ神話では、英雄イアーソンに裏切られた妻のメーディアが腹いせに自ら子どもたちをあやめてしまう。また、トロイア戦争の英雄アキレスは、ギリシャの総大将が自分の奴隷を奪ったため、味方でありながらギリシャ軍への協力を拒んだ。民話にも悪意は登場する。ある物語では、魔法使いが男に1つだけ願いをかなえてやろうともちかけるのだが、当然ながらこの申し出には落とし穴がある。男が望みを1つかなえたら、それが何であれ、同じことが2倍になって憎らしい隣人の身に降りかかると聞き、男は自分を片目だけ失明させてくれと頼むのだ<sup>1</sup>。こうした話は長い年月のあいだにほこりをかぶってはいるものの、登場人物たちの行動は現代のわたしたちにも通じるものがある。

こんにち、人間が悪意からつまらない行動をとることは誰でも知っている。たとえば駐車場で故意にもたもたしてほかの車を待たせる人もいれば、隣人の眺めを遮るためにわざわざ塀を建てる人

もいる。それにわたしたちは悪意が大きダメージをもたらしてしまうこともわかっている。離婚相手に仕返しするためだけに親権を得ようとする人もいれば、政局に混乱をもたらしそうな候補者にあえて投票する人もいる。にもかかわらず、悪意にはプラスの面もあると言われたら、すんなり納得できるだろうか？

そもそも悪意とは何だろうか？ アメリカの心理学者デヴィッド・マーカスは、悪意のある行動<sup>2</sup>とは、他者を傷付け害を与え、かつその過程で自分にも害が及ぶ行動と定義している。もつとも、これは「狭義の」定義であり、より広義の定義には、他者に害を与えるが、自分は傷付くリスクがあるだけの場合も含まれる。また、自分の利益につながるにもかかわらず、他者に害を与えるためにする行為も悪意のある行動といえるだろう。しかしながら、マーカスが指摘しているように、他者を傷付けることで必然的に自分も害を被るという狭義の定義は、悪意のある行動をそのほかの敵対行動やサディスティックな行動と区別するのに役立つ。

実際、悪意を理解するには、悪意に当てはまらない行動に目を向けるとわかりやすい。コストと利益という観点から人間の行動を考えた場合、他者との交流には基本的に次の4種類があり、そのうち2つは行為者に特別な利益を直接もたらす行動だ。人間は自分と他者の双方に利益をもたらすように行動（協力行動）することもあれば、他者ではなく自分だけが利益を得るように行動（利己的行動）することもある。第3の行動は自分がコストを負担して他者に利益を与える利他的行動だ。こうした協力行動、利己的行動、利他的行動については、これまで多くの科学者が生涯をかけて研

究してきた。しかし、第4の行動も存在する。自己と他者の双方に害を及ぼす悪意のある行動だ。これまで悪意のある行動は闇の中に放置されてきたが、これは望ましいことではない。わたしたちは悪意に光を当てる必要がある。

悪意について説明するのは難しい。悪意はまるで進化論に疑問を投げかけているかのようだ。全員に害が及ぶような行動が自然淘汰で失われなかったのはなぜだろう？ 本来なら悪意は生き延びられなかったはずだ。仮に悪意が長期的に見て行為者に利益をもたらすのなら、失われずに存在し続けているのもうなずける。だが、長期的利益をもたらさない場合はどうだろう？ こうした悪意のある行動はどうかすれば説明できるのか？ そもそもそんな行動は存在するのだろうか？

悪意は経済学者にも難問を突きつける。自己の利益に反する行動をするのは、一体どんな人間だろうか？ 長年経済学者は説明を要する問題があることにすら気付いていなかった。18世紀の著名な経済学者アダム・スミスは、人間は悪意のある「感情にかられて行動することがそり多いわけではないし」、たとえこうした感情にかられても「よく考えたすえ、行動を抑える」(『国富論』山岡洋一訳、日本経済新聞出版社)と主張している。時代は下つて1970年代、アメリカの経済学者ゴードン・タロックは、平均的な人は約95%利己的であると主張している。「強欲は善」(1987年の映画『ウォール街』の中で使われた、当時の資本主義経済を象徴する言葉)とされた1980年代、多くの人々は、この推定値は控えめだと感じたことだろう。

経済学者は人間を自己の利益を最大化すべく合理的に行動する生き物、ホモ・エコノミクスと見なしていた。また、例外はあるものの、通常は自己の利益といえは金銭的利益と解釈されている。ところが、後ほど第1章で論じるように、1977年に行なわれたある画期的な研究により、人間はタダで現金が手に入る機会に恵まれても、ときには平気で辞退することがわかった。アダム・スミスは楽観的すぎたのだ。タロックが提示した95%の残りの5%には、とても現実的で強い影響力を持つ要素が隠れていた。

悪意は害を伴うが、そもそも害とはどんな要素から成り立っているのだろうか？ ある行動が害を及ぼしているか否か判断し、悪意に基づいていると決定するのは誰なのか？ 極端な例だが、たとえば自爆テロを起こせば自分は来世で報われ、残された家族は今世で補償が得られると考えている人が実際に自爆テロで命を落とした場合、それは自分に害を及ぼしたことになるのだろうか？ 進化生物学には害を客観的に測定する基準がある。適応性(繁殖成功率)の喪失だ。なお、個人の適応性喪失を伴う悪意のある行動、いわゆる「進化的悪意」については第4章で考察することにする。一方、経済学者および心理学者は直接個人がコストを負う形態の害に注目しがちだ。この「心理的悪意」は長期的に見ると個人に予想外の利益を及ぼすこともある。こうした悪意はやがて利己主義へと発展する。

## 悪の中にある善の起源

悪意がどんなものかはわかったが、まだ2つの疑問が残っている。第1に誰かに悪意に基づく行

動をとらせる要素は何か？ つまり悪意がどのように作用しているのか？ これは悪意の至近要因と呼ばれている。第2に人間が悪意を抱く、より深い理由は何だろうか？ そもそも悪意はなぜ存在するのか？ 悪意は進化においてどのような機能を果たしているのか？ これは悪意の究極要因だ。ここで1つ、卑近な例だが、赤ん坊が泣く理由を考えてみよう。寒いからとか、お腹がすいたからという理由は至近要因にあたる。一方、両親にかまってほしいからという理由は究極要因だ。では、悪意の理由についてざぐれば何がわかってくるだろうか？

悪意の究極要因が得られれば、悪意がどのように現代の世界を形づくっているかという、差し迫った問題について考える端緒がつかめる。たとえば人類の祖先は糖分と脂肪分を大いに好んだおかげで、カロリーの高い食物を積極的にとるようになった。しかし、こんにちの西欧諸国では、糖分と脂肪分の高い安価な食品があふれ、かつては適応に役立っていた習性が、糖尿病や心疾患を引き起こしている。同じように悪意も人類と共に進化を遂げてきたわけだが、過去に想定されていた世界とはまったく異なる現代の世界に遭遇したら、一体どんなことが起こるだろうか？ 人類の祖先にはまったくなじみのない、さまざまなレベルの経済格差や不公平が存在し、ソーシャルメディアを通じたコミュニケーションが行なわれるようになった世界に悪意はどのような影響を及ぼすのか？

これが差し迫った問題である理由は、悪意は非常に危険に思えるからだ。見方によっては、悪意は人類にとってのクリプトナイト（アメリカンコミックスのヒーロー、スーパーマンの弱点とされる架空の物質）のようですらある。悪意は当然ながら協力の対極に位置する。これは懸念すべきことであ

る。というのも、協力は人類にとって非常に大きな力だからだ。人類が繁栄できたのは、協力して働く能力が極めて高かったおかげといえる。粘菌ですら協力することはあるが、人類は協力する能力をフル活用している。人類が血縁関係のない個体同士で大きな集団を形成して暮らせるのはそのおかげだ。人類ほど協力的ではないほかの霊長類にそんな芸当はできない。おかげで今のところ映画『猿の惑星』のように人類がサルに取って代わられる恐れはないが、サルに支配される以外にも懸念すべきことはいくつもある。もし悪意によって協力関係にひびが入ったら、人類の進歩を阻害するばかりか、現在直面している複雑な世界的問題を解決するのにも支障をきたしかねない。世界は良くなってきたといえ、進歩が保証されているわけではないのだ。

また、悪意は非常に恐ろしいものにもなりうる。自己の利益に束縛されない敵ほど恐ろしい相手がいるだろうか？ 自分勝手な人間も厄介ではあるが、少なくとも相手の利己心に訴えて説得することはできる。では、自分の幸福を犠牲にしてもあなたを傷付けようとするほどの悪意を持つ人には、どんな言葉をかけたらいだろうか？ 彼らは映画『ターミネーター』に登場する人間の姿をした殺人兵器のようなものだ。こうした人々は交渉にも応じず、説得不能で、あなたを殺すまではいかないとしても、少なくとも何かしら迷惑をかけるまで、決して止めることはできない。しかも困ったことに、彼らが存在するのはSFの世界だけではない。

第二次世界大戦後半、ドイツとロシアの戦いが激化する中、ヒトラーは列車の用途についてある決断を迫られた。東部で殺害するユダヤ人の移送に使うべきか、ソ連と戦うドイツ軍に必要不可欠

な武器や燃料、物資の輸送に使うべきか。ヒトラーが選んだのはホロコーストだった。ドイツが減  
ぶリスクを承知の上で、ユダヤ人を絶滅させようとしたのだ。悪意の恐ろしさは底知れない。

悪意は明確かつ甚大な危険をもたらす。悪意をコントロールするには、悪意を理解する必要があるが、それにはまず悪意を詳しく検証するほかない。そして、悪意を理解できたと思つたら、今度  
は別の要素が姿を現し、わたしたちは悪意について誤解していないか改めて考えずにはいられなく  
なるのだ。アメリカの哲学者ジョン・ロールズは、道徳上の徳は人々が「仲間としてお互いに関し  
て欲することが合理的であるような」性格特性の1つだが、悪意は人間が他者に欲しない特性であ  
り、「すべての人に危害を及ぼす」悪徳であると言っている<sup>15</sup>。『正義論』川本隆史・福岡聡・神島裕子訳、  
紀伊國屋書店)。だが、これは本当だろうか？ 悪意をより詳しく検証していくと、異なる側面が見  
えてくる。

というのも、どうやら悪意には善を促す力があるようなのだ。悪意はわたしたちが自分を高め、  
何かを創造する助けとなることもある。しかも、必ずしも協力の妨げになるとは限らない。実際の  
ところ、悪意は逆説的に協力を促すこともある。また、必然的に不公平を生み出すわけではなく、  
不公平をなくするための最強のツールの1つとなることもある。不公平や正しがたい不平等がある限  
り、人間には悪意が必要なのだ。

旧約聖書の『エゼキエル書』には、予言者エゼキエルが30歳のときに見たあるビジョンについて  
記されている。北方から大嵐が訪れるのだが、嵐の内部では火が燃えていて、その火の中から4つ  
の面を持つ生き物が生まれる。各面には顔があり、1つは人間、1つはライオン、1つは雄牛、そ  
してもう1つはワシだった。エゼキエルが見た生き物のように、人間の本质は異なる姿を併せ持つ  
キメラのようだ。わたしたちも世界に利己、利他、協力、悪意という4つの顔を見せている。人間  
は多面的であり、天使でもなければ悪魔でもない。自分自身を理解するには1つの面だけではな  
く、自分のすべての面を理解する必要があるのだ。人間は独自の行動のレパートリーを持った順応  
性のあるサルであり、利益を得るためにレパートリーのうちのどの行動をとるか、直面している状  
況によって決まる。悪意は魂に付いた邪悪な汚れなどではなく、魂の一部なのだ。単に人間には闇  
の面と光の面があるというわけではなく、闇の面が光を生み出すこともある。では、心の準備をし  
て、これから悪の中にある善の起源を見つけに行こう。

嫌がらせや意地悪など、悪意のある行動はマイナスの影響しか及ぼさないように思える。なにしろ善意や協力、利他行動などとは異なり、相手を傷つけ自分にも害が及ぶリスクがあるのだから。にもかかわらず、悪意は進化で失われることなく、今でも社会にはびこっている。一体なぜなのか？ 本書は、悪意にかんする多様な研究の最新成果（心理学・脳科学・遺伝学・人類学・ゲーム理論など）を駆使して、その謎に迫っていく。身近なエピソード（人間関係から、ビジネス、政治、SNS、文学、テロ、宗教まで）を織り交ぜながら、進められていく思索は実にスリリングだ。そして、人間観をくつがえすような、悪意の思わぬ効能や利点が解き明かされる。

著名な心理実験（最後通牒ゲーム・独裁者ゲーム）でも示されるように、悪意には主に2つのタイプがある。ひとつは「反支配的悪意」だ。相手が不公平な行動をとると、自分が損をしてまでも相手に害を与えようとする。こうした不平等やヒエラルキーに抗う者は「ホモ・レシプロカンス（互惠人）」と呼ばれる。親切で協力的であり、正義に関心を持つが、利他的というわけではない。正義を守ることは脳に快感を与え、自分を犠牲にして他の人々のために罰（コストのかかる第三者罰）を与える者は、ヒーローのように慕われる。興味深いのは、寛大で気前のいい善人までも、こうした悪意の対象となり、引きずりおろされることだ（善人ぶる者への蔑視）。

悪意のもうひとつのタイプが「他者を支配するための悪意（支配的悪意）」である。協力的ではなく、相手より優位に立ち、心理的に支配するために悪意のある行動をとる。こちらは「ホモ・ヴァリタス（競争人）」と呼ばれる。重要なのは、支配的悪意は絶対的な優位ではなく、相対的な優位を狙うこと。たとえば、金額が大きくてもほかの人より少ない額よりも、金額は小さくてもほかの人より多いお金を受け取る。運ではなく、実力で優位に立った者も悪意を抱かれやすい。才能は運よりも大きな脅威なのだ。そして競争が激化すると悪意は高まって、セロトニン値が下がり、背側線条体という脳の報酬系が活性化する。つまり他者に害を与える喜びが増すのだ。ある実験では競争の要素が加わると、悪意を持つ人のほうがはるかに多くの正解を出すことがわかっている。悪意は競争で他者より秀でるのに役立つわけだ。

さて、遺伝学や進化論から悪意はどう読み解けるだろう？ 悪意を持つ傾向は、遺伝的影響が強いことがわかつている。このように悪意にかかわる遺伝子が受け継がれてきたのは、やはり進化的な利点があるからだ。本書ではその仕組みを「ワイルソンの悪意（血縁者に利益が及ぶ）」と「ハミルトンの悪意（競争相手が害を被る）」に分けて探っていく。刺激的な考察が続くが、なかでも注目すべきは、悪意と罰の関係だろう。「罰は非協力的な人の行動を改めさせるために進化したのではない」「人間はまず相対的地位を高めるために悪意のある行動をとる能力を進化させ、その後、この傾向を罰という別の用途に使うようになった」と考えられるのだ。そして協力と公平性が高まる

のも、相対的地位を高めるため、相手に害を与えることの副次的な影響に過ぎない。人間は本来ヒツジのふりをしたオオカミなのに、自分はヒツジだと思い込んでゐる。そして実際に、悪意によって公平な行動が社会で増えていったことが示唆される——悪徳が美徳につながったのだ。

人間は理性のみで行動するわけではない。ときに理性に逆らつてでも、自由でありたいと願う。ドストエフスキの文学などを参照しながら、本書はそんな特性を「実存主義的悪意」と呼ぶ。理性は高慢であり、特権階級が支配するための手段としても利用される。悪意はこうした支配に抗する反応でもある。また、悪意を逆手にとつて良い結果へと導くこともできる。たとえば、実現できそうもない目標（ストレッチ目標）を掲げられると、反発してかえつてモチベーションが高まり、創造力をかき立てられたりする。悪意は不可能を可能にすることもあるのだ。

政治の世界でも悪意の影響は大きい。本書はヒラリー・クリントンとドナルド・トランプの大統領選を振り返りながら、人々の悪意がいかに政局を動かしたかを探っていく。トランプの「悪党ヒラリー」というレッテル貼りはわかりやすい例だが、そのほかにも本書でこれまで示されたさまざまな要因が絡みあつてることが明かされる。また、世界を白紙に戻したいという「カオスを求める傾向」や、「エリート過剰（反エリートの新エリート）」などは、トランプ支持が社会階層の底辺からエリート志向層まで広がつていたことを示唆する。さらに「人間は挑発的なメッセージには寛容

だが、それを説く人々には不寛容だ」という興味深い説も紹介される。

「神聖な価値」と悪意とのかわりも重要だ。人は神聖な価値を冒とくされると、理性的に考えなくなる。また、男性が社会的疎外を感じると、脳が神聖でない価値に対しても、神聖な価値に似た反応をするという。なお、コストをかけて別の集団に損害を加え、自分の集団に利益を与えようとする性向は、「偏狭な利他性」と呼ばれる。社会的支配志向性が高い者ほど、偏狭な利他性に基づく行動をとりやすい。こうした人々には、保守主義、国粹主義、愛国主義、文化的エリート主義、人種差別主義、暴力や不正行為の正当化……といった傾向が見られる。また、偏狭な利他性を持つ者が自分の集団と一体化し（アイデンティティ融合）、その集団が神聖な価値を象徴している場合には、その集団を守るために命を捨ててまで悪意のある行動をとるようになる。自爆テロのように。

たとえ相手に悪意を抱いても、現実的には高いコストをかけて相手を罰しようとはしない。報復を受けるリスクがあるからだ。そこで安上がりな悪意として、ゴシップなどを活用する（あるいは「神」による罰もそのひとつかも知れない）。ところが匿名のインターネット上では、報復の脅威が消えて悪意が解放される。こうした厄介な悪意はどうすればコントロールできるだろう？ 本書はその方法を、仏教の「慈悲の怒り」まで採り入れて考察している。

本書出版プロデューサー 真柴隆弘